

# 自己表現ワークシートを利用した不登校生徒への支援

星岡みのり・宮本正一

(岐阜県教育相談員・岐阜大学教育学部)

## Support to truancy student using self-expression work-sheets that is a form of expressive therapy

Hoshioka, Minori (Local government education adviser)

Miyamoto, Masakazu (Gifu University)

### I 問題

小学4・5・6年生の約30%は「今、学校生活の中で我慢していること」があり、その中の約76%は対人関係で我慢をしており、「言いたいことが言えない」という児童も多いという(伊田・有馬, 2007)。自分の思いを身近な誰かに伝えることができないと様々な不応症を示すようになる。本研究は、学校と家で感じる様々な思いを周囲の人に表出することなく不応状態になった中学生女子に対して、自己表現を促進する働きかけを行い、不登校解消に至った事例の実践報告である。描画や箱庭などの非日常的な形式や行為で自己を表現することには自己治癒的な働きがある(香月, 2004)。これらの行為は退行を促し、防衛機制を緩めさせ、そのことが精神内界の自由な表現を可能にして治癒的に作用する。またこれらの行為を遂行する過程で、いままで意識しなかった自己の姿や問題点に気づいたり、意識の幅が拡大して、それまでの悩んでいた問題や葛藤が溶解したり、変容が起こったりして自己の再統合が生じるのである。

### II 事例の概要

A子は中学2年女子(13歳)。以前通っていた学校(中学1年時)でいじめにあい、また、家族内でのトラブルも重なりx年4月よりy市内の中学に転校してきた。登校を願い転校してきたものの新しい学校に馴染めず、不登校になる(x年5月連休明けから不登校)。学校から登校の働きかけがあったものの、部屋に引きこもる状態が続き、担任とも会えない状態であった。家族構成は父・母・A子・弟(小6)の4人家族である。

A子は小さい頃から手がかからずよい子で、弟の面倒もよく見ていた。学校の成績は中の下くらい。マイペースな性格で、多少だらしない所もあった。転校前は、父親の両親(A子の祖父母)と同居していた。父親の両親は家の跡取である弟ばかりを可愛がり、A子の存在をあまりよく思っていなかった。特に祖母は、A子に対して辛くあたり、「行動がのろい」「家の孫じゃなければよかった」など言葉の暴力を浴びせることもあった。“活発で学習もできる孫”という祖父母の理想像からはかけ離れていたためか、A子が中1でいじめに遭い学校を休みがちになったことで、祖母からの暴言はさらに酷いものになった。

A子は両親に心配をかけまいと誰にも悩みを相談しておらず、長い間我慢してきた。両親は仕事をしていたこともあり、A子の異変に気がつくのに遅れた。食事を大量に取り吐くといった摂食障害の症状が現れたため両親が問いただし、いじめや祖母からの暴言が発覚した。A子の様子を見かねた両親は同居を解消し、転居・転校するという選択をした。

転居して新生活が始まったものの、A子は新しい学校に馴染めず再び不登校になった。欠席し始めた直後は、1ヶ月間ほとんど布団から出ることもなく、食事も母親が部屋まで運ぶ状態だった。環境を変えたにも関わらず登校できない自分を責め、摂食障害、不眠やリストカットなどの症状が出た。夏休みに入ると徐々に情緒が安定し、日中部屋から出て生活できるようになった。しかし、日中することもないため、テレビを見て1日をボーっと過ごすような状態であった。

母親は保護者仲間や種々の相談機関に出向き今後の対応について考えるようになった。その中で、学校復帰への一歩として適応指導教室への通室を試みようということになった。母親は仕事をパートに変え、A子との時間を確保するようにした。母親は、夫の両親との別居に踏み切る決断力と行動力がある。教育熱心であり、友だちも多く周囲に援助を求めることができるため、A子に対して過剰な依存をすることはしない。

父親は、仕事中心の人。転校前、A子が祖母から言葉の暴力を受け家庭内で不和が生じていた時も父親は単身赴任で家におらず、家庭での状況をほとんど知らなかった。A子の状態がひどくなってから母親が父親を説得し父親も転居に同意した。仕事先にも配慮を頼み、自宅から通える勤務地にしてもらい、家族の都合を優先する生活をするようになった。父親は、自分の両親を庇いたい気持ちもあり最初は事実を受け止めることに抵抗があったようだ。A子も、辛い時期に自分のことを守ってくれなかった父親に対して反発心のようなものがあり、家庭内ではほとんど会話がなような状態が続いている。

初回面接には母親と一緒に来室した。A子は体格がよく、実年齢よりもだいぶ大人びた印象を受けた。髪は前髪が顔にかかるくらいに長く、寝癖がついており抑うつ的で表情はあまりなかった。母親に促され自己紹介をした。初対面の人に対してそれほど緊張している様子は見受けられなかった。

2回目の面接では第一筆者と2人で話をした。質問によっては反応に時間がかかることもあったが、声の大きさも普通程度、時折第一筆者と視線を合わせて話すことができ、大人との2者関係においては特に問題はないと思われた。「石隈・田村式アンケートシート (生徒版)」に記入を求めると(x年9月8日実施)筆圧も弱く記入することに対して意欲的ではなかった。特に学習面や体力面に関しては「嫌い」「特にない」といった自己否定的な表現が多く空欄も目立ち無気力な様子であった。

第一筆者を含めた市の教育相談員3名と、担任、教育相談担当教諭で「石隈・田村式援助シート」を作成した。転校生であるA子は学校関係者との関係をほとんど築けていない。担任は定期的に家庭訪問をするが本人とはほとんど会えない。養護教諭、教育相談担当教諭との関係もなく、スクールカウンセラーにも相談していない。A子と母親にとって、母親の友だちや以前通っていたバレー教室の友だちなどは、学校生活に直接関係がないためかえって、現状を理解し支えてくれるよい資源の一部になっていた。

x年9月10日に、バウムテストを実施した。バウムは、全体のバランスが中心よりも左寄りであり小さい。筆圧は普通。幹には特に目立った特徴は見られない。枝は単線で描かれ、細めでやや右に広がっている。根は欠如している。地平線はなく、木の根元には影のようなものが見られる。取り組み中は集中力が続かず短時間で終わる。絵を描くのが苦手だといって描くのを嫌がった。

バウムは左に寄って書かれていることから、いじめ・祖父母からの暴言が心理的ダメージを与えているのか過去へのこだわりが強く見て取れる。幹と地面の接合部分が機械的であり、現実には不適応感

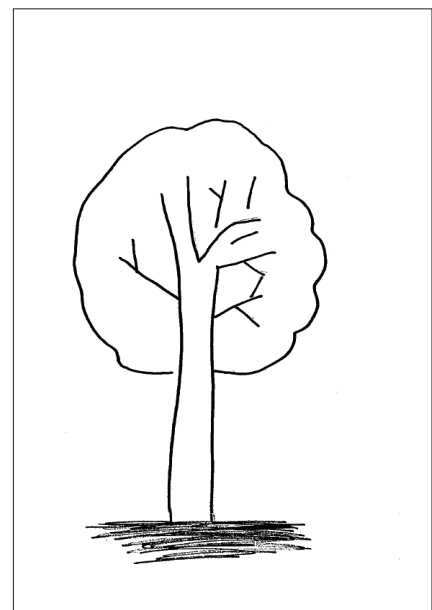


図1 支援前のバウム

を感じているように思われる。地面の黒い影からは、現状や将来に対しての不安感が感じられる。根の欠如からは、現状に対する不全感が感じ取れる。不登校になっている現状を本人が悲観的に受け止めているのではないかと思われた。集中力が続かなかつたのは気力が低下していることが感じられた。

### Ⅲ 心理教育的アセスメントに基づく、教育援助の方針と計画

A子は感受性が弱く、身体症状が発現するまで家族の者は精神的なストレスに気が付かなかつたと考えられる。したがって筆者との信頼関係の中でA子が心の中に抑圧している感情を自由に表現できる状況をつくり、そりまで充分表現できなかつた悩みや感情を表現し、筆者等がそれを理解のある態度で受け止めると、A子の中で堰き止められていた感情的緊張が緩められ、自分自身を客観的に眺めるゆとりが生まれることが期待される。図1のバウムは現実的でまとまっているので、自我の脆弱性には問題がないと思われるが、自由画のような自由度の大きなものではなく、枠組みの強い保護的で安全な方法を採用したい。その意味で、自己表現ワークシートによる個別対応と小集団での関わりを中心とした適応指導教室への通室はA子の支援を行う上で適当な場であると判断した。

適応指導教室への通室は時間を決め、短時間の活動から始め徐々に在室時間を延ばし、活動内容も個の関わりから集団での関わりを重点に置いたものにしていくことにする。いじめや祖母の暴言で傷ついた心の修復を図るには、他者からの働きかけにより、自尊心を回復させ、自己肯定感が持てるようにサポートしていく必要がある。まずはA子と第一筆者との2者関係の中で情緒の安定を図り人間不信を回復させる必要がある。そのために、A子のお話を十分に聴き共にゲームや創作活動などを行っていく中で、安心感と信頼感をつくっていく。また、枠組みの強い保護的で安全な『自己表現ワークシート』(大竹直子, 2005)を利用して、第一筆者とのリレーションを形成し、自身の心の整理に努め、自己分析、自己受容、他者受容ができるようにしていく。「表現活動は、描き手の内面にある欲求、感情、衝動を表現したり、処理できる」(加藤, 2004)機会、また人間関係を検討できる場を提供してくれる。「イメージをはき出し、イメージを見、イメージを感じ、イメージを語る力が自己治癒力となる」(徳田, 2000)。その中でA子の「思いにふれ、思いをつかみ、収め」小山(2007)、よい面を発見し、得意なことを活動に取り入れ、自己肯定感を高め自尊心の回復を目指していく。自己表現が治癒的に働くためには「見守る人」「聞き入る人」「ともに感じる人」としての治療者が、表現しているA子の「傍らにそっとするという保護的雰囲気とそれが醸し出す交流があってはじめて十全に動き出す」(飯森, 2000)ことをいつも留意していく。適応指導教室に通室する他のメンバーとの関わりや活動を通じて自己効力感を高め、意欲的な生活を営めるようにする。小集団の活動の中ではSGEを使い、自己開示や自己理解、他者受容を図っていく。

保護者に対しては、月2回開催される保護者会への参加をすすめ、心の開放や安定に努める。また、随時面接を行い、A子の状態の共通理解をしていく。中学校とは、月1回の定期訪問時にA子について情報交換し対応を検討する。週1回、適応指導教室において第一筆者を含めた他の教育相談員(3名)とケース検討会を開き、個別支援シートを中心に支援方針の確認や情報交換、支援方針の再検討を行っていく。以上のような方針と体制で支援を開始した。

### Ⅳ 支援の経過

#### 第1期 リレーション作りの時期(x年9月8日~x年9月30日) 通室日数11日

母親の送迎により適応指導教室に通室し始める。10時半から15時まで教室で過ごすことができる。

午前中には、第一筆者と2人で話をするを中心にし、主に『自己表現ワークシート』を活用してのリレーション作りに取り組んだ。第一筆者も同様のワークシートを作成し、本人が取り組みやすい雰囲気を作った。同じ作業をすることで第一筆者との一体感を作り出し、関係作りが深まるようにした。シート記入後は、「本人が嫌でなければ」という事を前提に第一筆者と2人でシェアリングを

行った。この時期にシートを介して第一筆者も自己開示を進めていったので、順調にA子との心理的距離を近づけることができた。

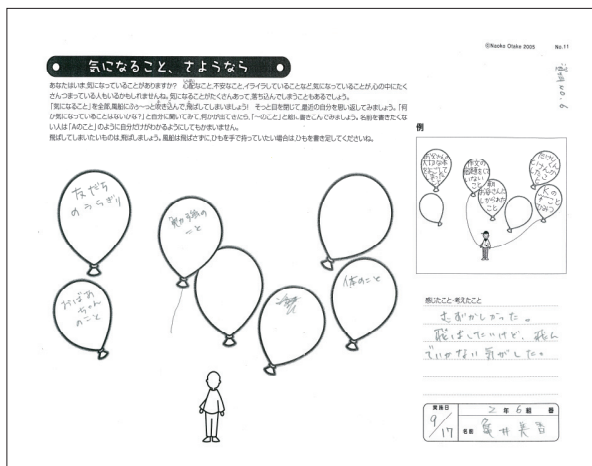


図2 「気になることさようなら」

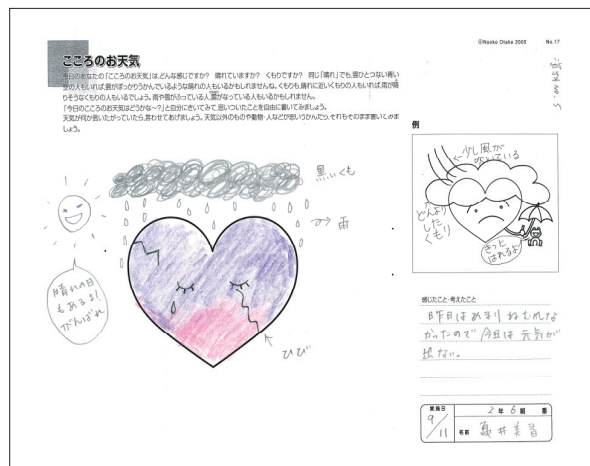


図3 「こころのお天気」

午後は、小集団での活動を中心に取り入れた。A子は無気力な様子で、何かを勧めてもなかなか取り組まない状態が続いた。負担の少ない、トランプゲームやボードゲームなどを行った。しかし活動は不活発であり集中力が続かず臥せて寝てしまう事も多かった。

上図はこの時期にA子の描いたワークシートの一部である。図2は、「気になること、さようなら」という主題のシートで、現在心の中にモヤモヤとある気になっていることを風船に書き、飛ばしてしまおうというシートであるが、7つある風船の全ては埋まらず、書きかけで消したものもある。書かれた内容は友だちの裏切りや祖母のことであるが、振り返りの時にはすっかりしない気持ちを書いていた。心の中が整理しきれない様子が伺える。また、もよもよとした心の内を外に充分表出することができず、抵抗があるようである。図3は「こころのお天気」という主題のシートである。白抜きのハートに現在の心の様子を表してみようというものであった。A子はハートにひびが入り泣いている絵を描いた。ハートの上に描かれた黒い雲からは、A子の心理的不安や自己表現を妨げている障害(祖父母の存在や友だちとのトラブル)が感じ取れる。

第2期 通室が安定してきた時期 (x年10月1日～11月14日) 通室日数16日

A子に少しエネルギーが出てきて、創作活動などに取り組むことができるようになった。ペーパークラフトの作品作りに取り組み、1時間程は集中できるようになってきた。しかし、「私は不器用だから・・・」「いつも中途半端にしかできないから…」などと自己否定的な発言が多く見られた。仕事は雑で、作品は完成するものもあれば途中でやめてしまうこともあった。

ワークシートを活用し、第一筆者とのリレーション作りを深める。この時期には自己肯定感を高めるようなワークシートを選ぶようにした。

次図はこの頃にA子が記入したシートの一部である。図4のシートでは、自分を「見守ってくれているもの」を書いた。以前と比べるとシートが埋まるようになってきた。人間の顔も落ち着いているように見える。しかし、自分を見守ってくれている存在としては母親と飼っているペットしか書かれておらず人間関係が狭いことが気になった。

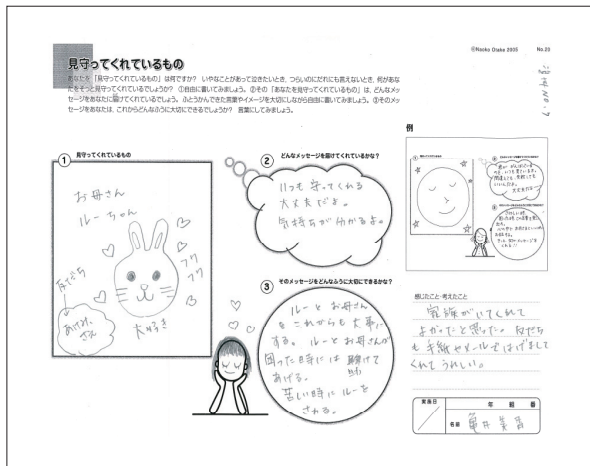


図4 「見守ってくれているもの」

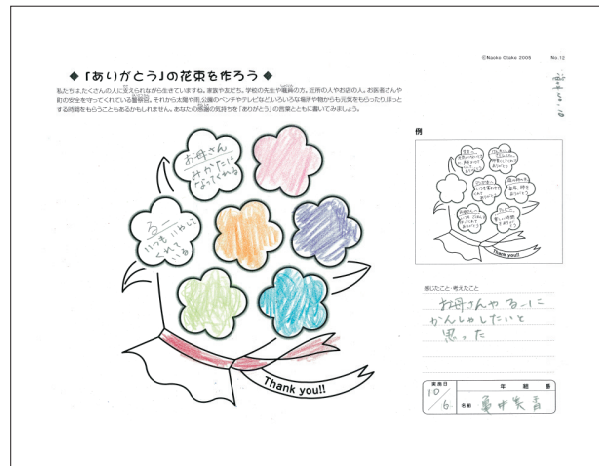


図5 「ありがとうの花束をつくろう」

図5のシートでは「ありがとうの花束をつくろう」という題で、感謝している人や物を記入した。このシートでも7つの花のうち、2つしか埋まらず、母親とペットの存在しか書かれていない。A子を支えている人的・物的資源が少ないと捉えられるとともに、A子自身も周囲に心を開いていないという印象を受けた。

10月26日、外出した先で偶然祖父母に出会う。距離を置いていた祖父母と久しぶりに会い、祖母に対してひどい恐怖を感じる、A子は帰宅後精神的に不安定になり、母親を中心として家族に暴力的に当り散らしパニックを起こした。ベランダから飛び降りようとするなど混乱した場面もあった。A子は適応指導教室を欠席しがちになり、部屋に引きこもる日が続いた。A子の様子を見かねた母親からの相談を受け、病院への通院を勧めた結果、定期的（週1回）に通院し服薬治療をすることになった。

服薬の効果もあってか、不眠の症状以外はなくなり、A子の情緒は安定してきた。再び、適応指導教室にも通うことができるようになった。

### 第3期 自信回復期 x年11月17日～12月22日 通室日数22日

11月中旬より他の通室生との関係作りができてきて、同学年の女子と会話やゲームを楽しんだりすることができるようになる。この頃は、SGE（構成的グループエンカウンター）のショートエクササイズなどを活用して、自己開示や他者受容を目的としたエクササイズを意識的に取り入れた。教室内に友だちができたことは、A子に著しい変化をもたらした。表情も明るくなり活動的になった。下級生に対してはよく面倒を見て、一緒に遊んであげるなど優しい面も見せた。体験活動にも意欲的に参加し、創作活動に取り組んだり、スポーツにも挑戦することができた。家では趣味のお菓子作りに取り組み、作ったものを教室の通室生に配ったりした。この頃から、将来の夢について語るようになる。子どもが好きなので保育士になりたいとのこと。第一筆者は、できるだけA子の良い所を本人に伝え、A子がマイナスに感じている部分も、リフレーミングして伝えるようにした。母親には教室での様子を伝え、家でも認めてもらい褒める機会を多く作ってもらうようお願いした。家での生活も安定してきた。

活動的になったA子は、転校前の学校の友だちと休日に遊ぶことができるようになる。12月6日には自転車で遊びに出かけたが、その際、祖父母に対するトラウマを解消しようと自転車で祖父母の家の前を通るなどの行動に出た。A子は今の自分を苦しめているのは祖父母のせいであると感じており、またその恐怖感を克服したいと考えたようだ。家の前を通っただけで祖父母と対面することはなかったのだが、A子は行動を起こせたことで満足した様子であった。気持の区切りがついたのか、「祖父

母のことは許せないけど、気にすることや祖父母のせいにして生きることはやめたい」と話してくれた。

この頃のワークシートには、色も使われ明るいイメージを感じるものが多くなった。図6のシートは、「魔法使いがやってきた」という主題のシートで、「1日だけ変身するなら」「1回だけ過去に戻るなら」「願い事を3つかなえてあげる」などの項目が設定されていた。変身の欄には年頃の女の子らしく、“アイドルグループのメンバーに入りたい”と書いた。また、過去に戻るとしたら“転校前の小学校の頃に戻り、もっと友だちと遊びたい”と書いた。願い事を書く欄には“保育士になる”と書き、将来の夢を書くことができた。将来の夢を書いたということからは、過去からのこだわりから解放されつつある状態とA子の気持ちが未来に向かい前向きな考えをもち始めていると感じさせた。

図7のシートは「こころの中のさけび」という主題のシートで、自分の気持ちに温かい言葉で語りかけて、それに対してコメントをするという課題を行った。シートに設定されている温かい言葉がけを素直に受け入れていることから、今まで抑圧されていた気持ちが解放され心が柔軟になってきているのを感じた。



図6 「魔法使いがやってきた」

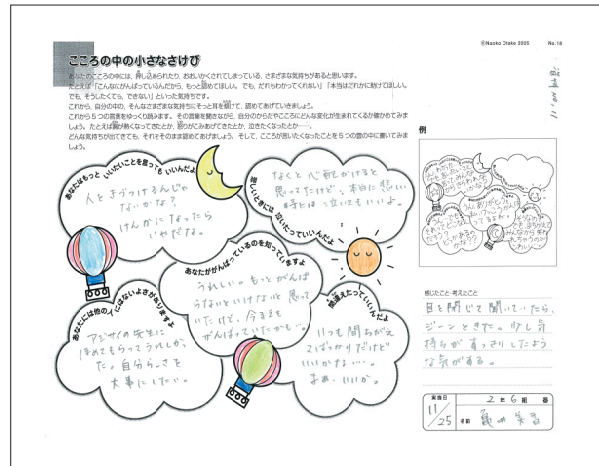


図7 「こころの中のさけび」

第4期 転換期 x+1年1月～3月終わり 通室日数20日 学校登校8日

1月になり、来年度に向けての具体的な目標を考えるようになった。「学校に登校したい」「友だちと遊ぶなど学校生活の思い出作りをしたい」「進学に向けて学習したい」といった意欲が高まる。新たな場所（過去の自分を誰も知らないところ）で、登校にチャレンジしたいという本人の意思が強く、両親もそれに同意したため再び転校を考えることになった。母親や本人との面接の中で、転校を繰り返すことへの危険性などについても話し合ったが、両親と本人の意思は固かった。前回の転校は現状からの逃避が目的であったことに比べ、今回の転校は前向きな選択であることや、本人の精神状態が大きく回復し、意欲に満ち溢れていることから、第一筆者としても転校を応援することにした。

この頃のワークシートでは、A子の前向きな心理状態が感じられた。図8は前回（9月初旬に実施）のシートと同じものであり、感謝している人や物などを花の中に書いた。シートに書かれた内容は以前と大きく変化し、また全ての枠を埋めることができた。家族以外の人間関係が広がり他者に対する信頼感も深まっていることが分かる。また、図9も初期に実施したものと同じ「心の天気」を描くワークシートであるが、ハートが色彩豊かに描かれ前向きな表現に溢れている。自己肯定感が高まり、情緒の安定が感じ取れる。ハートの周囲には雨が降ったり風が吹いたりしているものの、「雨の日もあれば風の日もある。晴れの日もあるさ!!」という文言が書かれていることから、困難を受け入れつつストレスに対する耐性がついてきたようにも感じられる。



図8 「ありがとうの花束を作ろう」



図9 「こころのお天気」

転校が正式に決まったことで、3月にはA子は更に前向きになった。来年度からの登校に備え、「学校に慣れたい」「登校の練習をしたい」ということで、在籍校へ登校チャレンジすることになった。まず相談室登校を提案し、A子と登校の条件等について話し合った。① 登校時間は給食までの午前中に限定する。② 初めは第一筆者と一緒に登校し、慣れたら1人で登校する。③ 相談室では漢字のワークを中心とした学習に取り組む。以上の3条件をもとに、学校側の担当者と第一筆者で事前に連絡会を開き、登校時のA子への対応について共通理解を図った。

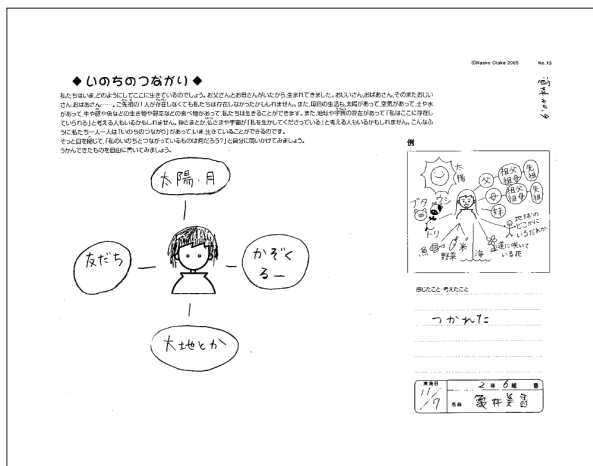


図10 11月初旬実施「いのちのつながり」



図11 3月中旬実施「いのちのつながり」

週2回の相談室登校から始め、徐々に相談室に慣れることができた。3月の半ばには、担任の授業に参加することもできた。来年度からは新しい学校でやり直すという目標があるため、それに向けてA子は自分から挑戦していくことができたようである。それらの挑戦と達成感がA子に大きな自信をもたらし、転校に対しての不安を軽減し、来年度に向けての希望と意欲を高めた状態で本年度を終えることができた。

図10と図11は同じ内容のシートを11月初旬と3月中旬に実施したものであるが、2つを並べてみると大きな変化が見て取れる。「いのちのつながり」という主題のシートで、自分を中心にしてそこから繋がる人や物の存在を表している。5ヶ月弱の間にA子の心の中で大きな変化が起こり、それが自

分を支えてくれているものへの確かな信頼感によって裏付けされているように見て取れる。図11に書かれている多くのものは以前からA子の周囲に存在していたものであるが、図10の時点ではA子の心理状態からそれらの存在に目を向けることができなかつたと推測される。心が解放され、自己肯定感が高まったことによって、自分を支えてくれている周囲の存在に気が付き、感謝の気持ちとともにシートに表現することができるようになったようである。この2つのシートから、自己肯定感と自己表現力の間には大きな関係性があり、また、自己肯定感は周囲の人からの支えによって確かなものとして表されるのだということを強く感じた。

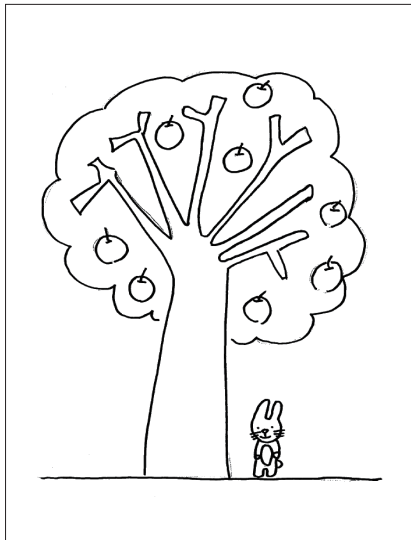


図2 支援後のバウム

x年3月16日にバウムテスト(図12)を実施した。このバウムは、全体のバランスがよく、木は中心に、用紙いっぱい描かれている。筆圧は普通である。幹は太くどっしりと安定している。枝は単線の枝がなくなっている。根は欠如している。地面の黒い影は消え、単線の地平線が描かれた。樹冠はバランスがよく、リンゴの実が多く描かれている。飼っている動物を表現しているのか、地面にはうさぎが描かれている。通室直後に描かれた絵(図1)と比べ大きく変化しているのが見て取れる。バランスがよく、大きくどっしりと描かれていることから、意欲の充実が感じ取れる。幹の太さからは自信の表れを感じる。枝の先端が少し不自然であり、不安定さも残っている。枝の多さから人との関係を作りたいという欲求が見て取れる。実が多く描かれているのは、今後の生活に対する希望、そして目標を獲得したいという意欲の現れであろう。動物を描いていることから、自己表現の欲求が高まってきていると感じる。地面の影がなくな

り地平線がつくられたことから、情緒の安定を感じる。

A子は現在、転校先の学校に順調に登校できている。A子から送られてきた手紙には、「不登校になったことを後悔していない。色々な人に出会え、パワーをもらった」という前向きな文言が書かれていた。

## V 考察

バウムテストと自己表現ワークシートを中心にA子の内面をアセスメントしながらA子を支援してきた。描画療法は「絵というイメージを媒介にした非言語的な治療技法なのであり、描かれた絵にこめられたクライアントの心の世界を共感的に理解することで、治療的な力を発揮できるものである」(宮下,2007)。「言語化以前の思いや言語化困難な感情的要素をイメージ表現で代行したり、補足したりする」(徳田,2000)ことが可能である。バウムテストからは、不全感や不適応感・無気力な状態から、自信が回復し情緒の安定や意欲の充実へと変化したことが確認できた。ワークシートによるエクササイズはかなり効果があり、特に初期段階ではA子と第一筆者の心理的距離を短時間で縮めることができた。この技法は描画療法の中でも「描き手であるクライアントに積極的に働きかけ、介入していく」(宮下,2007)技法と考えられる。A子はエクササイズのテーマ表現を試みる過程で、その背後にある心理的問題を意識的、無意識的に表現していた。筆者等は描画を通してクライアントの今の姿、思い、感情、希望、等を捉えることができた。A子との相互作用の中で得られた情報はその後のA子の方向性を暗示してくれた。SGEのエクササイズは、他の通室生との人間関係作りにおいて、自己表現力を身に付け、他者との信頼関係、自己肯定感の回復に有効であった。課題としては、どのようなワークシート・エクササイズを選び、どの時期に用いるのか、実施の計画性と実施後の振り返りが必要であった。



保護者に対しては、個別の面接のほかに月に2回開催される「保護者会」への参加を働きかけた。保護者会で親同士の話聞き、自分の思いを語ったりしたことが、母親の気持ちを楽しんで子どもを支えるエネルギーになったようである。母親の情緒の安定はA子にとっても大きな影響があったと感じている。

A子の在籍校は比較的大規模校であり、不登校生徒や非行傾向の生徒が多い学校であった。そのため、A子に関して細かいサポートや連携が図りづらく、定期的なケース会議が充分もてななかった。学校復帰に向けては学校との更なる連携が課題であると思われた。

本ケースでは自己表現ワークシート法を用いた。A子は、自分の感情を表出することが苦手な内面に納めてきた為、摂食障害や引きこもりの状態に陥っていた。A子の自己表現に問題があるのではないかと考え、自己の内面を表現する必要があると推測した。自己表現ワークシートでA子の感情表現に重きを置いた支援をしたことは非常に有効であった。

本ケースは、2回の転校によって終結したケースである。困難に直面した時の対処の仕方として“転校”という選択は最善策とは考えられない。その意味で、対処法には問題があったと考えられる。しかしながら、協力的な家庭環境や本人の持っていた自己変容の潜在能力が高く、2回の転居を実現させ結果として不登校状態が改善されたことは大変恵まれたケースであったと言える。近年の不登校児童生徒においては、複雑な家庭環境の影響を受けていたり、発達障害を背景に抱えているなど、多くの課題を抱えている子どもが多い。今後とも、様々なケースに対応できるよう多くの経験とスキルを身につけて適切なアセスメントと支援ができるようにしていきたい。

## VI 引用文献

- 加藤孝正 2004 動的絵画療法, 動的家族画療法 心理臨床大事典(改訂版), 倍風館
- 香月菜々子 2004 “絵を描く”ということ—臨床場面における描画の意味と, その有効性— 臨床心理研究, 27, 173-182. 上智大学大学院文学研究科心理学コース
- 小山充道 2007 描画を臨床に活かすには 臨床心理学, 38, 165-173.
- 石隈利紀・田村節子 2003 「チーム援助入門」 図書文化社
- 伊田絃子・有馬比呂志 2007 児童の「がまん」に関する研究 日本教育心理学会第49回総会発表論文集, p.471.
- 飯森眞喜雄 2000 芸術療法の適応と注意点 こころの科学, 92, 24-30.
- 宮下貞和 2007 描画テスト入門 臨床心理学, 38, 174-180.
- 大竹直子 2005 「自己表現ワークシート」 図書文化社
- 徳田良仁 2000 芸術療法の現在 こころの科学, 92, 10-17.